

《教育実践報告》

東日本大震災で被災した子どもたちへの放課後支援活動

—— 栃木県日光市と福島県会津若松市での遊びの課外活動の実践

大森 哲 至

はじめに

2011年3月11日に起こった東日本大震災は、一瞬にして多くの人々の命、そして平穏な暮らしを葬り去っただけではなく、福島第一原子力発電所の重大事故という大きな問題を引き起こした。

私は大震災の発生から3週間後に、大学院時代の恩師である横浜国立大学名誉教授の藤森立男先生と一緒に福島県の被災地を訪問した。当時の様子を振り返ると、福島県のなかでも大津波の被害にあった沿岸部の被害は甚大であり、辺り一面が破壊された家屋の残骸で瓦礫の山になっていた。そういった状況のなかを、自衛隊員や消防隊員が懸命に捜査活動にあたっていた。歩きながら瓦礫の山に目をやると、そこには干された状態のままの洗濯物や、再生ボタンが押されたままのCDプレーヤーがあり、そこで生活をしていた人たちの大震災直前までの平穏な生活の様子がありありと伝わってきた。

災害はときにその発生を機に、私たちのその後の人生を大きく変化させる出来事になる。突然の災害によって、今朝、食卓を囲んでいた家族が突然居なくなる、昨日まで同じクラスで勉強していた友人や仲間が突然居なくなる、これまで住んでいた家が突然なくなる、仕事や財産といった大事なものが突然なくなるなど、災害は、その発生を機に人々からたくさんのものを奪っていく。そして、なかには災害の発生を機として、それらのすべてを一瞬にして失ってしまう人たちもいる。

災害は、個人的なものであっても、また社会全体を揺るがすような大惨事であっても、被災者に物理的被害をもたらすだけでなく、その心に苦しみや悲しみを残していく。したがって災害後には、被災者が災害前の生活を少しでも取り戻すことができるように、経済的・物質的な支援をしていくことも必要不可欠であるが、それらと合わせて、被災者の心の苦しみや悲しみを少しでも和らげることができるよう、心理的な支援をしていくことも重要である。

支援活動の目的

われわれは、大震災直後に福島県の各地を訪問しながら、被災地で現在、何が必要とさ

れているのかを検討した。そして、被災地での支援活動の様子を知るために、いくつかの避難所やボランティアセンターを訪問したところ、そこにはすでにたくさんのボランティアの人たちが全国各地から集まっていて、炊き出し、支援物資の運搬、高齢者の介護、瓦礫の撤去作業などに精力的に励んでいた。そして、われわれもそうしたボランティアの人たちの頑張っている姿を見て、自分たちのできることをすぐにでも実施したいという気持ちが強まった。

さまざまな避難所やボランティアセンターを訪問していくなかで、特に印象的だったのは、当時、避難生活を余儀なくされていた子どもたちの様子であった。避難所で過ごしている子どもたちには、独り遊びや個別に同じ遊びをする平行遊びが目につき、相互に連携する連合遊びや共同遊びがとても少なかった。そして、そうした笑顔や言葉の掛け合いが極端に少ない子どもたちの様子から、大震災のショックは子どもたちにとって、非常に大きなものであることを感じた。

避難所で過ごしていた福島県の子どもたちは、大震災と福島第一原子力発電所の大事故によって、故郷や友だちと離ればなれになっているケースが多かった。そして、避難している子どもたちのなかには、大震災の発生を機に「家族と離ればなれで、いつになったらまたみんなで一緒に暮らせるのか心配」と語る子がいたり、「いつになったら家に戻ることができるのか、友だちと再会できるのか不安」と語る子が多かった。同時に、子どもたちの多くに、今後の生活について見通しが持てない状態に、心の安定を喪失させている様子がうかがえた。

福島県の訪問後、われわれはすぐに被災地の現状を踏まえ、友人や横浜国立大学経営学部、大学院国際社会科学科の学生たちと被災地での支援活動について話し合った。その結果、われわれの実現可能な活動は、避難している子どもたちが「少しでも元気を取り戻せるよう」「心の安定を少しでも取り戻せるよう」心理的な支援をしていくことではないかという意見で一致し、子どもたちの課外活動（遊び）の支援実現に向けて活動を開始した。

Schaefer (2011) は、課外活動（遊び）は楽しいことが原則であり、楽しんで活動することが子どもたちの心のケアにつながることを指摘している。また、Schaefer (2011) は、遊びの癒し効果を感情の発散、自尊心の向上、愛着の形成、トラウマへの適応、成長と発達、社会化、自己実現などの観点から分析しており、課外活動が癒しになることを理論的に説明している。したがって、われわれはこれらの指摘を踏まえ、楽しい課外活動（遊び）の場を提供することで、子どもたちがトラウマを克服し、コミュニケーション能力や社会性などを養い、ひいては生きることに對するエンパワメントを育てることが可能であると考えた。

トラウマを受けた子どもたちは自分の殻に閉じこもりやすく、孤立感を抱きやすい。このような悪影響を断ち切るためには、他の子どもたちや周囲の大人たちと共同活動を通して温かい人間関係を築く必要があり、自分が受け入れられ、配慮され、大切にされている

という感覚を味わうことが重要である。

子ども時代の共同活動の重要性について、Flanagan（2005）は、子ども時代の共同活動の体験は子どもの社会的信頼感を築くことにつながると指摘している。すなわち、社会的信頼感とは、人は社会に対する信頼感が持てるからこそ、自分もまた社会に対して貢献しようとするようになることであり、子どもたちに対して、課外活動を通じて、共同活動の機会を提供することは、災害からのトラウマの回復だけでなく、ひいては子どもたちの今後の社会的信頼感の形成にも大きな意味があると考えた。

以上のことから、本活動では、子どもたちへの課外活動（遊び）を通じて、子どもたちと周囲の大人たちが共同活動することにより、被災した子どもたちの心理的な回復を目指すことを目的とした。

日光市での課外活動

東日本大震災から3ヵ月後の2011年6月11日に最初の支援活動を実施した。しかし、最初の支援活動の実現までは想像以上に困難な道筋であった。支援活動を実施するにあたって、われわれは再度、4月下旬に福島県の各被災地を訪問し、支援活動実施の許可をお願いするため、市役所や教育委員会、学校、避難所、ボランティアセンターなどを訪問した。しかし、大震災からわずか1ヵ月後ということもあり、被災地では心の問題以上に、生活復旧のための支援が急務とされるなど、支援活動の実施はもう少し時間が経たないと困難であるとの回答が多くを占めた。

そして、最初の活動に至ったのは、福島県ではなく栃木県日光市の鬼怒川であった。当時、鬼怒川には福島県相馬市から避難してきた被災者が、鬼怒川パークホテル（110名）、鬼怒川国際ホテル（50名）に集団避難していた。われわれは、日光市の教育委員会や鬼怒川小学校を訪問し、課外活動の目的の説明と支援活動実施のお話をしたところ、避難している児童の保護者代表者と面会することができた。

そして、保護者代表者から普段の子どもたちの様子を聞き、それを把握したうえで、子どもたちの課外活動として、現在どのようなことが求められているかを話し合った。

課外活動の実施にあたって、われわれは、子どもたちの心理的な回復には、子どもたちが活動を通じて楽しめることであると考えた。同時に、その実現のために、支援する側が一方向的に課外活動を計画するのではなく、子どもたちや保護者の意見を取り入れたり、保護者や地域の人たちも一緒に課外活動に参加してもらうことが重要であると考えた。すなわち、支援者と子どもたち、保護者、地域の人たちがみんなで協力して活動をつくり上げる協働をテーマとした。

そして、話し合いの結果、実現可能な活動として、陶芸体験、お菓子づくり体験、絵本づくり体験を実施することを決めた。また各活動の実施にあたって、指導していただく各専門家の先生にコンタクトを取り、活動の趣旨説明や指導のお願いをし、承諾をいただく

た。そして、鬼怒川での活動は2011年6月から7月にかけて、合計5回実施した。

表1 支援プログラムの内容

	日時	内容	場所
1回目	6月11日(土)	お菓子づくり体験 担当 村橋先生	藤原総合文化会館 2階・調理室
2回目	6月18日(土)	絵本づくり体験 担当 渡辺・江竜先生	鬼怒川パークホテル 1階・鶴の間
3回目	6月26日(日)	絵本づくり体験 担当 渡辺・江竜先生	鬼怒川パークホテル研修室
4回目	7月3日(日)	陶芸体験 担当 伊東先生	宇都宮陶芸倶楽部アトリエ
5回目	7月23日(土)	陶芸作品の発表会	鬼怒川パークホテル研修室

お菓子づくり(6月11日)

都内でフランス菓子教室を主催するパティシエールの村橋和嘉子先生が指導し、テーマはクッキーづくりであった。当日は支援活動の初日ということもあり、子どもたちはスタッフと初めて顔を合わせたためか、とても緊張した様子であった。この日、子どもたちはキャラクタークッキーづくりなどに挑戦した。最初は緊張していた子どもたちであったが、クッキーの形成をはじめると少しずつスタッフと打ち解け、楽しそうに製作に取り組んでいた。

焼きあがったクッキーにアイシングで仕上げをする段階に入ると、子どもたちはアンパ



図1 お菓子づくり体験の様子

ンマンやミッキーマウスなど、それぞれのお気に入りのキャラクターを真剣に描いていた。クッキーができあがると、自分の作ったクッキーを「見て、見て」と子どもたち同士で見せ合ったり、保護者や支援スタッフに説明して見せたり、自分で作ったクッキーの味に「おいしい」と笑顔を見せたりなど、楽しんでいた様子だった。

絵本づくり（6月18日・26日）

子どもを指導したのは東京学芸大学附属国際中等教育学校の渡辺有理子先生と明治大学附属明治中高等学校の江竜珠緒先生だった。テーマは飛び出す絵本づくりと間違い探し絵本づくりであった。飛び出す絵本づくりでは、先生からの説明が終わると、子どもたちはアイデアを練りながら画用紙いっぱい絵を書きはじめ、ペットや大好きな食べ物など、思い思いのイメージの絵本を楽しんで作成していた。友人同士でしゃべりながら作業をしている子が多く、支援スタッフが子どもたちの言葉をひろいながら関わっていた。発表会では、絵を見せながら飼っていたペットとの思い出話をする子もいたり、避難前に食べた食べ物の話をする子もいたりなど、本の紹介と避難前の日常との関係で発表していた子どもが多かった。

間違い探し絵本づくりでは、カタログやチラシから商品の写真を切り取って画用紙に貼り、特定の種類の商品のなかに別の種類の商品を混ぜるというものであり、たとえば、果物のなかに1つだけ野菜が混じっていて、その野菜を探し当てるというみんなで遊べる絵本だった。作業中は、答えを悟られないようにと、笑いながら互いに自分の作品を見せないようにしたり、支援スタッフに自分の集めているチラシがないか聞いてきたり、支援スタッフと一緒に探すなどしていた。そして発表時には、みんなが大きな声で間違いを探し当て、身を乗り出して楽しんでいた。

陶芸体験（7月3日・23日）

陶芸体験をするにあたって、この日子どもたちと保護者は、貸切バスで鬼怒川から宇都宮市にある宇都宮陶芸倶楽部に移動した。指導したのは宇都宮陶芸倶楽部を主催する伊東功太郎先生で、テーマは手びねりでの作陶と絵づけであった。開始前に、先生から作り方の指導と説明があり、子どもたちの方からリクエストをするなど、子どもたちからの関わり方も積極的になっていた。一人分の土の分量は決まっていたが、作品の数や形は自由だったため、子どもたちは他の人の作業を見て回ったり、何を作るか話し合ったり、土を分けてあげたりなどの協力する姿を見ることができた。

絵づけまでの乾燥時間にはどんな色をつけられるか確認したり、作った作品の焼き上がりを想像して話したり、土いじりを続ける子がいたり、山の中腹という立地だったため、外に出て遊んだりおしゃべりをする子たちもいた。先生から絵づけの開始が伝えられると、みんな素直に従い、驚くべき集中力で丁寧に色づけをしていた。



図2 陶芸体験の様子



図3 活動に参加した子どもたちと保護者、支援スタッフ

また、陶芸体験終了後には、宇都宮の地域の人たちから、お肉や野菜、飲み物などの差し入れがあり、子どもたち、保護者、支援スタッフ、地域の人たちなど、みんなでバーベキューを楽しんだ。さらに、そうした交流を通じて、子どもや保護者が大震災当日の大変な状況や避難生活での不安・悩み、今後の心配事などを自然に話してくれ、支援スタッフやボランティア、学生にとってもこの活動が、より一層意味深いものとなった。

日光市での課外活動に対する子どもたちの評価

上記5回の活動に参加した子どもたちは延べ36名であり、各活動の終了後に子どもたちに対してアンケート調査を実施している。調査では「活動を楽しめたか」「活動に興味をもったか」「活動に満足をしているか」「今後も活動に参加したいと思うか」について質問し、回答は3件法「はい」「いいえ」「どちらでもない」であった。

このアンケート調査には28名が回答している。「活動を楽しめたか」の質問をしたところ、「はい」と回答している子どもは26人（93%）であった。「活動に興味をもったか」の質問では、「はい」と回答している子どもは22人（79%）であった。「活動に満足をしているか」の質問では、「はい」と回答している子どもは25人（89%）であった。「今後も活動に参加したいと思うか」の質問では、「はい」と回答している子どもは27人（96%）であった。以上の調査結果を考慮すると、多くの子どもたちが今回の課外活動を肯定的に受けとめていることが推察された。

会津若松市での課外活動

日光市での活動後、福島県会津若松市で次の活動を実施した。当時、会津若松市には、福島県大熊町の被災者の多くが原発事故の影響によって仮設住宅での避難を余儀なくされていた。われわれは夏休み中に会津若松市の各仮設住宅を訪問し、避難生活をしている子どもたちの様子や、現在どのような支援が求められているのかなどについて、自治会長や保護者の方たちから話を聞いた。そして、避難中の様子について、大震災から半年が過ぎても、子どもたちの多くは、新しい環境に慣れずに不安になっていたり、故郷に戻ることができず、家族や友達と離ればなれになっている寂しさから、元気のない様子が目立つなどの声を多く聞くことができた。そこで、われわれは日光市で実施した課外活動について紹介をし、課外活動として、陶芸体験、お菓子づくり体験、絵本づくり体験などの実施を提案したところ、会津若松市河東学園の仮設住宅で避難している自治会長から実施の承諾をいただいた。当時、河東学園の仮設住宅には、200名程の大熊町の被災者がおり、園児、小学生が42名も含まれていた。活動は、会津若松市河東学園の仮設住宅の集会所で、2011年10月から11月にかけて合計5回実施した。

表2 支援プログラムの内容

	日時	内容	場所
1回目	10月22日（土）	絵本づくり体験1 担当 渡辺・江竜先生	会津若松市河東学園 仮設住宅の集会所
2回目	10月29日（土）	絵本づくり体験2 担当 渡辺・江竜先生	会津若松市河東学園 仮設住宅の集会所
3回目	11月12日（土）	陶芸体験 担当 伊東先生	会津若松市河東学園 仮設住宅の集会所
4回目	11月19日（土）	お菓子づくり体験 担当 酒井先生	会津若松市河東学園 仮設住宅の集会所
5回目	11月26日（土）	陶芸作品の発表会 宇都宮餃子祭り	会津若松市河東学園 仮設住宅の集会所

絵本づくり1 (10月22日)

子どもを指導したのは東京学芸大学附属国際中等教育学校の渡辺有理子先生と明治大学附属明治中高等学校の江竜珠緒先生だった。テーマは園児がチラシを使った間違い探し絵本づくりで、小学生は飛び出す絵本づくりだった。園児は保護者と協力しながら作成している子が多く、チラシを見ながら、親子で「また焼肉を食べに行きたいね」、「来年は家族で旅行に行きたいな」などの会話をしていたことがとても印象的だった。小学生の挑戦した飛び出す絵本は、比較的簡単に立体化できるので、カタツムリやリンゴの皮むきなど、それぞれの子どもが工夫を凝らして作成していた。また、子どもたちのなかには保護者が不在のため、一人で参加している子もおり、子どもたちが少しでも寂しい思いをしないようにと、支援スタッフは配慮を心がけた。

絵本づくり2 (10月29日)

本活動も渡辺有理子先生と江竜珠緒先生が指導した。絵本づくり2のテーマはしくみ絵本づくりだった。子どもたちはアイデアが浮かぶと画用紙いっばいに絵を描きはじめ、シールやテープなどの素材も使いながらカラフルでユニークなしくみ絵本を完成させていた。高学年の女子のひとりには自宅で飼っていたペットを描いていた。長期の避難生活のなかで亡くなったと話してくれたが、大切な家族の一員であったペットを作品に残すことで、いつまでも共に過ごした日々を思い出せるようにしたのかもしれない。また、2回目の絵本づくりの途中に、活動に参加していなかった子どもたち3、4人が「参加していいですか?」と訪ねてきて、活動に合流した。合流してすぐに「何を作ってるの?」と自然にみんなの輪に入り、楽しそうに絵本づくりを行っていた。

陶芸体験 (11月12日)

指導したのは宇都宮陶芸倶楽部を主催する伊東功太郎先生で、場所は会津若松市河東学園の仮設住宅の集会所であった。今回は日光市での活動とは違い、アトリエではなく仮設住宅の集会所だったことから、栃木県宇都宮市から手ロクロ20台、信楽土30キロなどを会場に搬送した。前回の活動の時とは異なって、長距離移動があり、集会所の使用時間にも限りがあるため、支援スタッフは、当日スムーズに作業を開始できるように、前日の夜から準備に取り掛かり、セッティングは深夜にまで及んだ。前回と勝手が違い、スタッフも心配するなか、陶芸体験がスタートした。テーマは手びねりと絵付けであった。子どもたちは、当日の体験に備えて、あらかじめ何を作陶するかを決めていたようで、先生の説明が終わると、真剣に作陶を始めた。子どもたちのなかには、大きな茶碗を作成しながら「これでたくさんご飯を食べるんだ」や、大きなアンパンマンの顔を作成し「これ何だかわかる?」などとスタッフに声かけをする子もいた。またなかには、自分のためではなく「これはおじいちゃんの灰皿、こっちはお母さんへあげる花瓶」など、一緒に暮らしてい

る家族へのプレゼントとして、作陶している子もいた。

お菓子づくり（11月19日）

子どもを指導したのは会津若松市内でベーグルカフェをしているパティシエールの酒井加津子先生で、テーマはクッキーづくりだった。当日は酒井先生が子どもたちのために、バンダナとエプロンを用意してくれた。子どもたちはお菓子づくりの前から、お互いにバンダナをし合うなどとても楽しそうな雰囲気だった。先生の説明が終わると、子どもたちはすぐにミッキーマウスやアンパンマンなどクッキーの型抜きをはじめた。クッキーが焼きあがるまでの時間は、自分のクッキーがどんな風に焼けるのかを楽しみにしていて「早く焼けるといいな」、「いい匂いがしてきた」など、スタッフに楽しそうに声かけをしていた。クッキーが焼きあがると、仕上げにアイシングをしたが、キャラクターの顔をうまく描けない園児に対して、手を差し伸べる小学生もいたりなど、協力して作業に取り組んでいた。クッキーが出来上がると「売っているのよりもおいしい」など、自分で作ったクッキーの味に、子どもたちはとても満足している様子だった。また、活動の最後に、酒井先生からの手作りケーキのプレゼントもあり、子どもたちも「こんなにおいしいケーキははじめて」「先生のケーキ屋さんに行きたい」など、とても喜んでいた。



図4 お菓子づくりに参加子どもたちと保護者、支援スタッフ

陶芸作品の発表会（11月26日）

陶芸体験で完成した作品の焼成後、宇都宮から作品が運ばれ、陶芸作品の発表会を行った。当日はすでに親しくなっていた子どもたちが、準備に取りかかる支援スタッフの近くに集まり、和やかな雰囲気のなかで発表会がはじまった。

また、発表会の終了後には、栃木県鹿沼市にある餃子専門店「正嗣」鹿沼店さんから、仮設住宅の方々が少しでも元気になるようにと餃子1,080個の差し入れがあり、集会所で宇都宮餃子祭りを行った。作品の発表会が終わると、支援スタッフが準備した焼き餃子、揚げ餃子、水餃子などが配られ、子どもたちだけでなく、仮設住宅で暮らしている大勢の人たちが参加した。餃子祭りでは「温かい食べ物が嬉しい」、「流石は宇都宮餃子」などの声が寄せられ、たくさんの笑顔に出会うことができた。餃子祭りの終盤には、仮設住宅の人たちから柿やリンゴなどの果物の差し入れがあり、支援スタッフへのねぎらいと感謝の交換があった。

会津若松市河東学園仮設住宅での課外活動に対する子どもたちの評価

上記5回の活動に参加した子どもたちは延べ42名であり、各活動の終了後に子どもたちに対してアンケート調査を実施している。調査では「活動を楽しめたか」「活動に興味をもったか」「活動に満足をしているか」「今後も活動に参加したいと思うか」について質問し、回答は3件法「はい」「いいえ」「どちらでもない」であった。

このアンケート調査には21名が回答している。「活動を楽しめたか」の質問をしたところ、「はい」と回答している子どもは20人（95%）であった。「活動に興味をもったか」の質問では、「はい」と回答している子どもは18人（81%）であった。「活動に満足をしているか」の質問では、「はい」と回答している子どもは19人（89%）であった。「今後も活動に参加したいと思うか」の質問では、「はい」と回答している子どもは20人（95%）であった。以上の調査結果を考慮すると、多くの子どもたちが今回の課外活動を肯定的に受けとめていることが推察された。

考察

今回、日光市と会津若松市で子どもたちが体験したお菓子づくり、絵本づくり、陶芸などの課外活動は、それぞれの子どものにとって初めての体験であった。したがって、各活動の最初の段階では「できない、どうしよう」という反応が子どもたちの多くに見られた。しかし、各先生や支援スタッフ、ボランティアの人たちの丁寧、かつ親切的な指導と励ましによって「次第にできるようになっていく」プロセスを観察することができた。このようにして子どもたちは「やればできる」という自信と、周囲の大人たちから受け入れられ、配慮されているという安心感や信頼感を持つことできたと考える。

また、各活動を通じて、先にできるようになった子どもが他の子どもにアドバイスし、相互に教え合う様子も観察されているなど、子どもたちのコミュニケーション能力や協調性、社会性などを育む機会を提供できたと推察する。

遊びには多様な種類があり、お菓子づくりや絵本づくり、演劇、演奏、スポーツ、運動、陶芸体験など、さまざまものが考えられる。遊びの支援活動を計画する際、被災した子ど

もや被災地のニーズを把握することは非常に重要であると考え。同時に、それらニーズを把握するためには、被災した子どもたちが何を望んでいるのかについて、子どもたちや保護者の声を注意深く聞くことや推察することが必要になってくる。

また、遊びの支援活動は心の専門家だけでなく、一般のボランティアや学生も参加することができるなど、遊びの体験を通じて、一般のボランティアや学生も心の問題について理解を深め、心の専門家と連携しながら活動することができる。

今回の支援活動でも、活動の実施においては、たくさんのボランティアや大学生が参加した。そして、彼らを観察すると、実際に被災地を訪れ、子どもたちや被災者と接することで、被災地では現在何が必要で、今後どのような支援を必要としているのかを自ら進んで考える契機にもなっている。また、今回の活動に参加した一般のボランティアや大学生の多くが、これからも被災地や被災者とのつながりを継続していきたい、活動の場をたくさんの被災地へと広げていきたいなど、各々が希望を語っていた。同時に、そうした希望が今後、新たな支援活動に結びつくことを期待している。

今後の課題

これまでのさまざまな大規模災害の事例を見ると、このような支援活動やボランティア活動に関しては、東日本大震災の場合だけではなく、どの事例でも災害直後はたくさんの人たちが被災地を訪れ、被災地や被災者の元気を取り戻すことができるような取り組みをさまざまな形で実施している。

しかし、その一方で、災害から時間が経った後、何年か経った後に被災地を訪れてみると、時間の経過とともに、そうした活動や人々の関心もだんだんと減少していることがわかる。たとえば現在の福島県の様子を見ても、大震災直後は多くの人々の関心が被災地や被災者に向けられていて、仮設住宅の掲示板などでも応援メッセージやさまざまな催しものの情報をたくさん見ることができたが、災害からの時間的経過にもなって、その数もだんだんと減少してきていることを痛感する。

そして、そのような現状を考慮すると、被災者にとって災害からの復旧・復興には、非常に長い時間を要するの事実である。同時に、どのような災害事例でも復旧・復興への道のりを歩んでいく過程では、被災者の多くが長期にわたって、心のケアやボランティア活動をまだまだ必要としているなど、支援活動は災害直後だけでなく、長期的に継続していくことも重要であると考え。

付記

本活動を実施するにあたって日光市教育委員会、鬼怒川小学校、日光市立藤原総合文化会館、鬼怒川温泉ホテル、会津若松市河東学園仮設住宅の皆様には大変お世話になりました。また各活動でご指導していただいた先生方、計画、準備等で協力していただいた支援

東日本大震災で被災した子どもたちへの放課後支援活動
—— 栃木県日光市と福島県会津若松市での遊びの課外活動の実践

スタッフの皆様にも大変お世話になりました。ここに心より感謝の意を表します。

参考文献

Schaefer, C.E. (2011) *Foundations of Play Therapy*, John Wiley & Sons.

Flanagan, C.A., Gill, S., and Gallay, L. (2005) "Social participation and social trust in adolescence: The importance of heterogeneous encounters".